GYAL SAMURAI

奏音-ＫＡＮＯＮ-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＹＡＬ　ＳＡＭＵＲＡＩ

【Ｎコード】
Ｎ１１３０Ｈ

【作者名】
奏音－ＫＡＮＯＮ－

【あらすじ】
時を越えて戦国時代へやって来てしまった主人公の米沢神流。桶狭間で織田信長と出会い信長に気に入られた神流は男装をして信長の小姓になり元の時代へ帰る手がかりを探しながら働くことになるのだった。

PROLOGUE（前書き）

【始：２００９．０５．１５】

※教科書や資料をチラッと
見ただけでほとんど想像なので
歴史とは異なると思います。

PROLOGUE

あたしたちが
知ってる程度の歴史なんて
所詮、ほんの一部でしかない。
それが本当なのかさえ分からない。

アニメや漫画で描かれた
歴史は結局、紛い物でしかなくて。
事実(ほんとうのこと)なんて今は誰も知らない。
知ることだって出来ない。

それでも、あたしは・・・。

第一章：始まりの旋律

ガタンゴトンーガタンゴトンー。

聞き慣れたこの音を聞きながら
学校へ行く為の電車の中であたし
米沢　神流　［ＹＯＮＥＺＡＷＡ　ＫＡＮＮＡ．］は
手すりも使わず両足でバランスを
保ちながら携帯をいじっていた。

国語と歴史と体育以外の科目が全部
鬼やべぇ馬鹿ギャルなあたしの
唯一の自慢はこの生まれながらの
ずば抜けた体力と運動神経。

（※鬼やべぇ＝やばいの最上級）

そしてサラサラツヤツヤで
シャンプーのＣＭに出れるんじゃね？
ってくらい綺麗で長くて左だけに
金メッシュが三本入った茶色の髪。
・・・・が、唯一の取り柄っていうか
自慢？みたいな。

「・・・か、神流・・・助けて・・・・。」

今にも泣きそうな声で助けを求めたのは
隣にいる飯島　奈央　［ＩＩＺＩＭＡ　ＮＡＯ．］。
奈央は控えめで真面目で優等生。
あたしとは正反対のタイプだけど
あたしにとって奈央は
可愛らしい妹のような存在。

愛する渋谷のハチ公
並みに可愛がってマス。

『ん？』

視線を携帯から奈央に変えると
奈央は泣きそうな顔をしていて奈央の
すぐ後ろには五十代のオッサンがいて
オッサンの手は明らかに痴漢行為をしていた。

『何してンの？』

あたしはオッサンの手首を掴み
奈央から引き離してそう質問した。
もちろん、睨みつけながら。

「・・・なっ！なんだね君は！
いっ、今すぐこの手を離したまえ！」

周りの目を気にしながら慌てて言う
ベタな決まり文句に呆れながらも
一切手の力を弱めないあたし。

『あんたがこの子に謝ったら
離してあげてもいーよ？』

「ばっ、馬鹿言うんじゃない！
私は何もしていない！無関係だ！
ちょ、ちょっと触れただけじゃないか！
満員なんだから仕方ないだろう！」

その台詞を聞いてあたしは
勝ち誇ったかのような笑みを浮かべた。

『別にあたし、触れたことに関して
謝れとは一言も言ってないンだけど？』

「・・・・ッ！！！」

『あたしの勝ちってことで
ちゃんとこの子に謝ってよね。
それとも今すぐ降りて交番行く？』

「・・・誰が行くものか！」

オッサンはそう叫んで丁度
開いた扉から走って逃げ出した。

『あーっ！奈央！
あんたは先に学校行ってな！』

そう言い残してあたしは逃げる
オッサンの後をすごい速さで
追いかけ、背中に跳び蹴りを
一発食らわした。

「ぐはあっ！」

『あたしから逃げよう
なんざ一億年早いっ！』

鞄から取り出した縄で男の両手を
縛り、白い紙に「痴漢行為をしました」
と書いて男の額にテープで貼り付けた。

何で縄なんか持っているのかというと
答えは簡単。奈央が痴漢に遭うのは
これが初めてじゃないからだ。
・・・ってか、あの可愛さ故に毎日の
ように被害に遭ってるからね、あの子。

そんなこんなで、とりあえず、あたしは
可愛い奈央を泣かせた&汚らわしい手で触れやがった
痴漢男をいつも通り、交番に連れて行くことにした。

『毎日お疲れ様でーす♪』

あたしはオッサンを交番にいた
若い警官に引き渡して
わざとらしく微笑みかけた。

「またお前か。」

『またお前かとは失礼なー！
あたしは奈央の護衛ギャルとして日々

常に頑張っているんだぞヨッシー。』

ちょっと紹介し遅れたけど
この失礼な男は顔見知りの警察。
名前が吉川だからヨッシーね。

「あー、はいはい。
・・・ってかお前学校だろ？
さっさと行って来いよ。」

『分かってますよーっだ！』

あたしはヨッシーに向かって
あっかんべーをして交番を後にした。

『・・・あ、ヤバ。
今日の一時間目津田センじゃん。』

津田セン（歴史の先生）遅刻すると
いっちいちうるさいからなー。
説教で授業つぶれるくらいだもんなー。

『よし、サボるか。』

そう決断したあたしは持て余した
時間を潰すために学校とは
違う方向へ向かった。

ちなみにサボるのは当然あたしの為だが
クラスの真面目っ子達の為でもあるのだ。

「ん？あ、神流じゃん。
何してんのお前ー？サボりー？悪〜。」

ある目的地へ向かっていたあたしを
引き止めたのは幼なじみの
大野　祐介　［ＯＯＮＯ　ＹＵＵＳＵＫＥ．］だった。

『あー、なんだ祐か。
そういうあんたこそサボりでしょ？』

「いや、俺は一時間目サボるだけ！
だって歴史とか意味ワカンネーし。
それに歴史なんて全部が全部マジ話な
訳じゃねーんだから覚えても意味なくね？」

あー、確かにそれは言えてるな。

教科書に書いてある程度のことなんて
ほんの一部でしかない訳だしそれが
本当かどうかも分からないんだから。
歴史は数学とは違ってどんなに
調べても本当の正解なんて見えない。
・・・自分の目で見ない限りは、だけど。

『あんたってただの不良
馬鹿じゃなかったんだねー。』

「あ、あのなァ、誉めるのか
貶すのかせめてどっちかにしろって。
ってかこれからどこ行くんだ？お前。」

『・・・お祖母ちゃんのお墓参り。』

お祖母ちゃんと仲が良かったお寺のお坊さんに
渡すものがあるから来て欲しいって言われたから
そのついでに・・・ね。

「・・・そっか。
じゃあ、久々に俺も行く。」

『へー、珍しいじゃん。
どういう風の吹き回し？』

「別に？単に暇だからってだけ。」

『わー、明日は豪雨かなー。
槍が降ってくるかなー。』

小馬鹿にするように笑って
道の途中にあった畑に咲いていた
白、ピンク、赤、三つの色の
コスモスを何本か貰った。

「あー、そうだなー。
明日槍が降ってお前の頭に突き
刺さることを密かに願ってるよー。
・・・ってか取っていーのかよソレ。」

『これだけいっぱい咲いてるんだし
お墓に供える為に少しくらい貰った
って罰は当たらないっしょ。』

「ま、そーだな。」

それからしばらく歩いて長い坂道を
体力と足の速さだけが取り柄の
あたしは軽々と登ってお寺に
たどり着いた。

そしてあたしはお花に水をあげていた
お坊さんに挨拶をして小さくお辞儀をした。

『どうも、お久しぶりです幸久さん。』

小さくお辞儀をしてあたしは
お祖母ちゃんの墓石の前にさっき
摘んだばかりの淡い色のコスモスを
そっと置いた。

紹介し遅れたけどお坊さんの
名前、幸久さんっていうんだ。
お祖母ちゃんは歳のわりに最期まで
ユッキーって呼んでたけどね。

「おや、神流ちゃん、祐介くん。
久しぶりですね。それにしても
また学校サボったんですか？」

幸久さんはあたし達が学校を
サボったことは怒らずに
笑って出迎えてくれた。

『いやー、ちょっと痴漢男を
捕まえてたら一時間目始まる
時間になっちゃって・・・。』

「ははは、神流ちゃんは本当に
美和子さんによく似てらっしゃる。」

美和子っていうのはお祖母ちゃんの名前。
お祖母ちゃんのお父さん、つまり
曾お祖父ちゃんがつけたんだって。

『そうですか？』

「えぇ、美和子さんも
神流ちゃんくらいの時は毎日のように
危険を省みず悪い人を捕まえてましたよ。」

『あんなに女の子らしくしなさいって
うるさかったお祖母ちゃんがそんなことを？』

「えぇ。」

「すげーな遺伝って。
お前の馬鹿力と素早さは
あのばあさんから来てたのか。」

バコッ！

『それで、渡したいものって何なんですか？』

いちいちうるさい祐を一発殴って
あたしは何もなかったかのように話を進める。

「ああ、実は神流ちゃんが
十七になったらコレを渡すように
美和子さんから頼まれていたんですよ。」

幸久さんは何の変哲もない一本の
木刀とダイヤモンドのような
クリスタルのような透明で綺麗な
宝石のぶら下がっているネックレスを
取り出してあたしに渡した。

『コレは一体何なんですか？
ってかあたしまだ十六ー・・・・』

「何言ってんだよ。
今日はお前の誕生日だろ？」

『へ？今日何日？』

「九月四日。」

・・・そんなバナナ。

・・・じゃなかった、そんな馬鹿な。
自分の誕生日忘れるとかどんだけ
時間忘れしてんだろ、あたし。

「私の口からは何とも・・・。
・・・時が来ればきっと分かりますよ。
例え何があっても時代に流されず
自分の信じる道を行きなさい。
そうすればきっと幸せになれる。」

そんな意味深な言葉だけを残して

幸久さんはお寺に戻ってしまった。

「何なんだろうな、今の。
幸久さんらしくなかったっつーか
何か今日の幸久さんなんか変じゃね？」

『・・・そーだね。』

コスモスを供えてあたしは
素っ気ない態度でただ一言
家に帰る、と祐に言って祐の
引き止める声も無視して
お寺を後にした。

さっきの幸久さんの言葉が何度も
リピートされて頭の中を駆け巡る。

『何があっても、って
一体何が起きるって訳・・・？』

落として無くさないように
ネックレスを首にかけて
何の仕掛けも無さそうな

木刀をじっと見つめた。

『大体、お祖母ちゃんは何で木刀なんか・・・・。』

・・・そう小さく呟いた時だった。
たくさんの桜の花びらが突然吹いた
強い風で舞い、あたしを包み込んだ。

『わああっ！何！？』

何でこの季節に桜の花びらなんかー・・・。

そう言おうとしたが急に眠気に
襲われてあたしは意識を手放した。

戦国時代

ザァァァー・・・。

強い風と豪雨が桶狭間を覆う中。
田楽狭間で今川義元の本陣が
休息をとっていた頃。

気絶していたあたしは目を覚ました。

『・・・・ここ、何処？』

辺りを見渡す限り見えるものと
言ったら崖と雨でぐちゃぐちゃに
なった地面くらいだった。

しかも豪雨のせいで視界が悪く
おまけに制服と鞄がびちょびちょに
なって全部濡れてしまっていた。

『・・・・ワケわかんない・・・・。』

さっきまで家までの帰り道に
居たはずなのに気づいたら見たことも
来たこともない場所にいて、
しかも晴れていた空はあいにくの豪雨。

そんな災難に見舞われたあたしは混乱状態に
陥りながらも冷静を保ち、とりあえず、
雨宿り出来る場所を探すことにした。

その途中・・・。

「うわああ！誰か助けてくれえぇ！」

誰かの助けを求めるが聞こえて来た。
考える暇も無くあたしの足は反射的に
声のした方へ向かっていた。

そして、あたしが目にしたのはボロボロの服を着た、
まるで教科書やテレビで見た農民のような人が
いかにも盗賊って感じの人達に襲われている
信じがたいものだった。

もちろん、あたしだって馬鹿じゃない。
微かにした血の臭いでこれがドラマの撮影や

演技なんかじゃないことくらい直ぐに分かった。

一歩間違えれば死ぬかもしれない。

・・・・・だけどそんなことをいちいち
考えてる暇なんて無く、農民らしき
人が盗賊に斬られかけたところで
素早く動き、持っていた木刀で
盗賊の刀を思いっきりぶっ飛ばした。

「・・・・な、何だァ！テメェは！？」

「女みてェだが見たこともねェ
変な格好してんなァ・・・。」

「ま、今川様の邪魔する人間は
全員始末するだけだろーよ。」

「あァ、そうだな。」

盗賊達が次々に口を開き、話している

隙を見てあたしは驚いた顔をして
目を閉じたり開けたりしている農民に
小さな声で逃げるように言った。

「す、すまねぇ嬢ちゃん・・・・・！」

慌てて逃げ出した農民を庇うように
後を追おうとした盗賊達の前に
立ちはだかって木刀を向けた。

「邪魔だ！そこをどけ！斬られてェのか！？」

『・・・斬られたい訳ないじゃん。』

「だったら、さっさとそこをどけ！」

『・・・・・・・・はい、分かりました。
・・・ってどくわけねーだろ馬鹿っ！』

この状況でノリツッコミするとか、
ある意味天才・・・ていうか国宝級の馬鹿？

『・・・殺されるって分かってるのに
助けられるかもしれない人が
目の前にいるのに見殺しに
なんて出来ないしフツー！』

例え、それで死のうと構わない。
見返りを求めてる訳じゃない。
あたしが助けたいから、助けるんだ。

「じゃあ仲良くここで死ねェェーっ！」

盗賊が一斉に襲いかかって来た瞬間。
木刀は微かな光と桜の花びらに包まれて
銀色に輝く刃となって盗賊達を切り刻んだ。

「くっ・・・。」

そして真っ赤な血が流れ、盗賊達は
痛みに耐えられずにその場に倒れた。
とっさの出来事だったが奇跡的に
急所は外れていた。

『・・・・木刀が・・・刀に変わった・・・・？』

気付けば腰には鞘がかけてあった。
突然のことに驚きながらも、あたしは
びしょびしょのハンカチで血を
拭き取って刀を鞘に納めた。

「こっちです秀吉様！」

先ほど助けた農民の声に反応して
振り返ると馬に乗った武士っぽい
猿のような人と農民と武器を持った
たくさんの兵がいた。

・・・ん？秀吉？猿っぽい？様？武士？兵？
・・・・あのー・・・えっと・・・・・織田信長の家臣？

天下統一を成し遂げた、あの豊臣秀吉？

「おめぇさんが今回の戦で勝つために
重要なこの道案内役を盗賊達から
命を張って守ってくれた娘かい？」

『え？あー、多分そうですケド・・・・。』

戦・・・。
やっぱりここはあたしのいた
時代じゃなくて戦国時代なんだ・・・・。

「変わった服装じゃが刀の腕は
立つようだからおめぇさんさえ
良けりゃ傭兵としてワシらと一緒に
戦ってくれねェか？もちろん褒美は出す。」

『あ、あたしで良ければ・・・。』

行く宛も無いし何となく
そうするべきだと思ったから
あたしは秀吉という人の
仲間に加わることにした。

そして歩きながら今回の戦に
ついて色々説明してもらった。

「今回はここ桶狭間で休息を
取っておる今川義元に奇襲を
かけるっちゅー作戦じゃ。」

桶狭間・・・今川義元・・・。
確かこの戦は今川軍の方が
兵の数が多くて織田軍が
圧倒的に不利だった戦だ・・・。

織田軍が勝つ為には奇襲を
成功させるしかない、か。

何でこんなことを知ってるかって
いうと異常なほど歴史が好きだった
お祖母ちゃんに耳にタコが出来る
くらい教えられたから、ってわけ。

『・・・あの、秀吉さん。
織田信長・・・様、って一体どんな人なんですか？』

敬語って難しい・・・。

「信長様は一見冷静で威厳のある
お方じゃが、ワシは信長様ほど天下を
取るに相応しい方はおらんと思っとる。
冷酷でありながらも優しいお方じゃ、信長様は。」

・・・その言葉を聞いて思った。
秀吉さんは本当に信長さんを
慕ってるんだなって。

「ま、詳しいことは己で知るが良いさ。
人の考えや想像なんぞアテにならんからな。」

秀吉さんは付け足すようにそう言った。

確かに人の考えだとかイメージは
人によって違うからアテにならない。
そういえば祐も同じようなこと言ってたな・・・。

祐と奈央、今頃どうしてるんだろ？

「・・・あーっと、ここです秀吉様！
今の内なら雨が降ってるから
近づいても気づかれねェハズです！」

「うぬ、案内ご苦労じゃった。
危ない目に遭わせてすまんかったな。

奇襲をかけてる間、茂みに隠れておれ。」

「秀吉様と信長様の為なら
どうってことありやせん！」

案内役の人は笑って答えて
すぐそこの茂みに隠れた。

「今なら利家達が本陣の守りを
薄くしてくれておるおかげで攻められる！
それを無駄にせん為にも行くぞ！」

秀吉さんの言葉をキッカケに
兵達は次々に木々の間を通って
ぐしゃぐしゃの道を降りて行った。

あたしもそれに遅れないように
転けながらも慌ててついて行った。

「うわあああー！！織田軍の奇襲だー！」

勝てるという余裕からか本陣にいた兵は

戦の経験が少ない寄せ集めの兵だらけで
兵の何人かは情けない悲鳴を上げて逃げて行った。

戦は総大将を倒せば終わる。
つまり、今川義元を打ち取れば
無駄な血が流れずに済む。

そう考えたあたしは刀を向けて立ちはだかる
兵達の太股を動けない程度に浅く斬って
進みながら今川義元を必死で探した。

そして走り回った結果奥の方に
一番偉そうな鎧を着た男を見つけた。

『えーっと、あのー。
今川義元ってそこの座ってる
だけの偉そうな人ですか？』

・・・我ながら間の抜けた質問だ。

「なっ！？小娘！
義元様になんという口の聞き方を！
それに貴様、織田の雇った者であろう！」

強そうな武将があたしの喉元に刀を向けた。
雇った者であろう・・・って情報早いな、オイ。

『いや、ちょっと、そんな物騒なもの
向けないで下さいよマジで。』

なんか首に刀が刺さったりしたら
めちゃくちゃ痛そうじゃん。
ってか首に刺さったら死んじゃうじゃん。

「「いや、これ戦だから！
刀向けるの当たり前だから！」」

あ、ボケたら敵全員にツッコまれちった。

「・・・小娘一人にそう騒ぐでない。
それはそうと私に用があるの
だったな小娘。申してみよ。」

今川義元らしき男は刀を下げるように
唯一生き残っていた武将の一人に言うと
椅子に座ったままあたしを見据えた。

『・・・負けを、認めて降伏して下さい。』

負けを認めて降伏してくれれば
もう誰も死ななくて済むんだ。
これが一番良い最善策のハズだ。

「・・・お主の気持ちは
嬉しいが、それは出来ぬよ。」

あたしの考えを察したのか
今川義元は少し悲しそうに笑った。

『・・・どうして？』

「負けを認めて自分だけ
生き残ったら勝つの為に死んで
逝った者達に顔向け出来んだろう。
それに信長が生かしてくれるハズもない。」

『・・・・で、でもっ！』

「・・・もう良いのだ。

さあ、他の者より先に首を
討ち取って手柄にするが良い。」

『・・・・・・・・っ！』

あたしは刀をギュッと握り締め、
わざわざ首を切り落としやすい
体制にした今川義元の首元に刀を向け、
刀を大きく振り上げた。

だけど刀はカシャンと音を立てて
地面に落ちた。涙と一緒に。

『・・・・人の命を奪うなんて
あたしには・・・出来ない・・・・。』

そう呟いてあたしは地面に膝をついた。
それを見た兵達は今の内だと叫んで襲いかかって来た、が。
兵達の刀は突然現れた馬に乗った
男の刀と片腕によって受け止められた。

「・・・・あの猿が見込んだ傭兵というから
見に来てみれば、何をしておるか馬鹿者。」

『・・・・・ばっ、馬鹿者！？』

初対面なのに馬鹿者と言われて思わず張り詰めていた
緊張感やシリアスな雰囲気が一気に吹き飛んだ。

「・・・・き、貴様は！織田信長！？
敵の総大将が何故こんなところに！」

え・・・・・・？

・・・・・この人が・・・・・織田信長・・・・・？

「・・・ふん、二度も言わせるな。
猿（秀吉）が見込んだという傭兵が
どんなものか気になったから見に来た。それだけだ。」

「総大将自ら小姓も連れず、小娘一人を見る為に
敵本陣に乗り込むとはさすが尾張のうつけよの。」

今川義元の言葉に信長さんはふんっと鼻で笑った。

「貴様は一足先にあの世に逝って
俺の天下取りを見ているが良い。」

そう言って信長さんは今川義元の首を
自らの刀でいとも簡単に切り落とした。

あたしは、切り落とされた首を
見たくなくて視線を逸らした。

これが、死を覚悟して戦った
たった五千ほどの織田軍が四万以上の兵を

率いていた今川軍に勝った瞬間だった。

・・・その後、総大将を失った今川の兵達は
織田軍の為に戦うという兵だけが織田軍の
支配下に置かれ、織田軍の為に戦わない
という者はその場で切り捨てられた。

「ほれ、これでも飲むと良い。」

一度にたくさんの死を見て泣いていた
あたしを気遣って秀吉さんは温かい
お茶の入った竹筒をくれた。

「・・・・・すまんかったな、
腕が立つからと言っておめぇさんに
戦をさせるなんて軽率じゃった。
本当に申し訳ない。」

頭を下げる秀吉さんを見てあたしは首を横に振った。

あたしを戦に誘った秀吉さんも

戦った今川軍と織田軍の兵達も
今川義元の首を斬った信長さんも

・・・・誰も、悪くない。

・・・これは戦で。
ここは“戦国時代”なんだ・・・。

悪いのは戦う覚悟が無かったあたし自身だ。

「・・・それはそうと。
信長様がおめぇさんに話があるらしいんだが・・・。
嫌だったらワシから断るが・・・、どうする？」

信長さんがあたしに、話・・・？

『・・・行きます、あたし。
信長さんのところまで連れてって下さい。』

「・・・・そうかい、じゃあ、ついてきな。」

あたしが行くと言ったからなのか
秀吉さんは少し安心したような表情で
信長さんのいる場所へ案内してくれた。

さすばに認められている家臣とはいえ、
主の命令に背くことは出来ないのだろう。

「・・・・信長様。
例の傭兵を連れて参りました。」

秀吉さんが地面に膝をつけて頭を下げたので
あたしも一応真似して頭を下げる。

「・・・・ご苦労。
秀吉、お前は下がって良いぞ。」

「はっ。」

そうしてあたしは信長さんと二人だけで話すことになった。

・・・・・つか、なんで見張りとかいないの！？
緊張するじゃん！殿様と二人きりとか、本当、心臓に悪いって！

「・・・・さて。
お前に聞きたいことは山ほどあるが、まずは名を聞こう。」

『・・・よ、米沢　神流です。』

「どこから来た？」

『え、えーっと、それはー・・・。』

「未来から来ました～！」
なーんて言って信じてもらえるのかな？
信じてもらうどころか怪しまれて
殺されたりしそうじゃない？

だからといって嘘をつくわけにもいかないし・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ええーい！
もう面倒くさい！一か八かだッ！
（→難しい考え事とか出来ないタイプ）

『・・・い、今の時代よりも
ずっと先の未来から来ました。』

・・・・・・・あーあ、言っちゃった。

お腹ぶっ刺されるのかな。
首ふっ飛ばされるのかな。
それとも生き埋め？

「そうか。」

はっ！もしかして敵だと思われて
拷問して惨殺されるのかな？

・・・・・って。

『・・・・し、信じてくれるんですか？』

水に顔バシャバシャしなくて済む？
（昔やっていた拷問の一種。）

「ああ。」

『ど、どうして・・・ですか？』

だってこんな戦のある時代だよ？
そんな簡単に信じて良いの？

「服装や容姿、持ち物を見る限り
本当にお前が未来から来たと
考えれば全て辻褄が合うからだ。」

『な、なるほど。』

さっすが殿様！あったまいー！

「・・・ところでお前、行く宛てはあるのか？」

・・・・・・・・し、しまった。
戦うことで頭いっぱいで後のこととか全然考えてなかった。

『・・・・な、無いです。』

ここが戦国時代じゃなかったら
行く宛てくらいあったんだけどね・・・。
祐ん家とか祐ん家とかトカトカトカ・・・。

「・・・だろうな。
もしお前が時代に戻る手がかりを探すまでの間
俺の小姓として俺に仕えるならば
空いている部屋をお前にくれてやろう。
もちろん普段の生活に必要な物もな。」

『・・・・・・・・・・・・・こ、小姓ですか？』

・・・小姓って確か身の回りの
お世話したり護衛したりするヤツだよね？
アレって男の子がやるもんじゃないっけ・・・？

「そうだ。
皆には女であることを隠し、
男装をして俺の小姓として働け。」

えぇぇー・・・。

・・・いや、まあ、男装ってか
男のフリするのには自信あるけどさ??
（高校の学園祭で男装したしね。）

バレた時のことを考えると
夜も・・・・・・・・眠れます。余裕で。↑

まあ、断ったらこの世界で
生きていけない訳だし。
さすがに野宿は嫌だし。
仕方ないか。

『・・・やります、あたし。
帰る手がかりを見つけるまでの間
小姓として働かせてください。』

そんなこんなであたしは
信長さんの小姓となった。
桶狭間から城に戻ったあたしが
与えられた部屋は広くて綺麗で
生活するには十分だった。

・・・・というか広すぎるくらい。
あたしの部屋の何倍だ？コレ。

ちなみに小姓の仕事はお茶を出したり
信長さんの護衛とかが主な仕事らしい。

（秀吉さんが説明してくれた。）

まあ、要するに掃除とか料理とか自分に
出来る範囲のことをすれば良い訳だ、うん。

当然、今は髪の毛をポニーテール状態にして
眉毛を男っぽく書き直してあるから
あたしが女だとはバレない！・・・・ハズ。

そして男装するときに一番問題な
胸は元々小さいから包帯でグルグル
巻きにしただけでＯＫなのさ！

（女としては悲しい。）

あたしは太陽の光が射す薄暗い
誰もいない部屋に寝転って
城に来て直ぐ乾かした
鞄の中から携帯を取り出した。

携帯の上画面には電波の良い悪いを
示す三本線ではなく圏外という
文字だけがポツンと表示されていた。

・・・・正直。

機械や電気が当たり前のように
在った元の時代と比べると
ここの暮らしは少し不便だけど。
帰りたいと強く思いはしない。

両親はあたしが中学の時に事故で
他界してるから一人暮らしだし。
兄弟だっていないし。

祐と奈央以外の学校の友達は
上辺の付き合いだから。

あの時代に帰りたいと思うような
要素なんて特に無い。

ただ、祐と奈央に会えないんだと
思うと少し胸が痛む。

寝転がって感傷に浸っていた
あたしの視界に綺麗な
女の人の整った顔が映った。

「何してるんですか？」

突然のことで目が点になっている
あたしに構わず彼女は珍しいものを
見ているような表情でそう質問してきた。

『えっと・・・・昼寝、です。』

あたしは戸惑いながらもそう答えつつ
起き上がって男座りをした。

「お昼寝は良いですけど
こんなところで寝たら
風邪引いちゃいますよ？」

彼女はフフフと笑って持って来た
食事をあたしの目の前に置いた。

『えっと・・・・貴女は？』

お腹が減っていたあたしは「どうぞ」
・・・と微笑む彼女の言葉に甘えて、

白いご飯、味噌汁、漬物、焼き魚など
健康に良さそうな和食をゆっくり
口に運んでよく噛みながら話を進めた。

「あ、すみません。
信長様からの命令で明日から貴女と
一緒に城内の掃除をするように言われて
来ました、静葉［ＳＨＩＺＵＨＡ．］です。」

名前を名乗った後、静葉さんは
あたしにしか聞こえないくらいの
小さな声で「男装の件も信長様から
お聞きしていますのでご安心下さい。」
・・・と言って微笑んだ。

あたしは小さく頷いてよく噛んでいた
割に五分もしない内に全てを平らげた。

『・・・・あ、そうだ。
静葉さんって忍びですよね？』

あたしがそう聞いた瞬間、
静葉さんは食器を片付けるために
立ち上がろうとした足を止めて
少し険しい表情になった。

「・・・何故そう思ったんですか？」

『あ、いや、確信は無いんですけど
静葉さんがここまで来る間の足音
全然聞こえなかったし全く気配も
しなかったからもしかしてって思って。』

「・・・そうですか。
お察しの通り私は忍びです。
今は本業の方はお休みしてるんですよ。」

『なるほど。』

「ああ、そうだ、神流さん。」

部屋を出る直前で何かを思い出したのか
静葉さんはこちらを向いた。

『はい？』

「男を装うからには神流という名では

バレてしまう可能性があるので仮の名を
考えた方が良いと思いますよ。」

仮の名前かあー・・・。

うーん・・・。

あたしが好きなもの＝新撰組の乙ゲー。

あたしが好きなキャラ＝沖田総司。

沖田総司＝江戸時代。

今＝戦国時代。

戦国時代＝まだ生まれてない。

決断＝パクりになるけどいっか。

ポンポンポンポーン☆

『明日から、あた・・・じゃなくて俺。

沖田総司［ＯＫＩＴＡ　ＳＯＵＺＩ］って名乗ります。『

戦う覚悟と生きる覚悟

あたしが仮の名として沖田総司と
名乗ることを決めてから三日後・・・・。
あたしは城内の長い廊下をペースを
乱すことなく一定の速さで余裕で
雑巾がけしていた。

・・・・・・・・・のだが。

ドンッ!!

『わっ!』

余裕ぶっこき過ぎて部屋から出てきた
男の人に勢い良くぶつかってしまった。

「・・・おい、大丈夫か?」

男の人はぶつかったことに
怒らずに怪我は無いかと心配して
手を差し伸べてくれた。

『・・・す、すいません。』

あたしは男の人の親切に甘えて
あたしよりも大きなその手を
借りて起き上がった。

「お前、名前は？」

手を差し伸べてくれた人は
あたしよりも身長が高く顔が
整っていてまさに美男子だった。

・・・・・ここの人って綺麗な人が多いくて
自分顔見るたびに悲しくなってくるＹＯ。

『・・・お、沖田総司です。』

うおあー。←変な叫び
間違えて米沢って言いそうデシタ。

マジすんません。

「・・・ああ、信長様の新しい小姓か。」

『はい、そうです。』

常に敬語を使うようになって
少しずつだけど段々慣れてきた。
もちろん男口調にも。

「沖田、お前、武器は扱えんのか？」

・・・・・ブヒ・・・・・σ´Å、o）？

・・・・・・・・武器・・・・・・・・Σ（´▽、ノ）ノ！？

『さ、さすがに体力と怪力が取り柄の
ヒロインでも武器は扱えませんヨ・・・。』

思わずボソッと呟いた。
ちなみにヒロインって言葉は昔の人には
伝わらないハズだから大丈夫デス！
（→カメラ目線　↑どこにカメラが？）

って誰に言ってるんだ？あたし。

「なら、俺が練習相手になってやろうか？
いくら小姓だつっても武術は必要だろう？」

・・・た、確かに小姓の仕事に信長さんの
護衛もあるらしいし、武器が使えないと
さすがに鬼やべぇかな？

なによりこんなイケメンに練習相手に
なって貰えるなんて滅多にないし？？？

『・・・・はい、お願いしますっ！』

そうしてあたしはさっさと仕事を
済ませて稽古場へと向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1130h/

GYAL SAMURAI

2010年10月9日04時06分発行